

次の文章を読みあなたの考えを六〇〇字以内で書きなさい。

あらゆる領域で、感情交流の乏しい子ども、青年、さらには中年が増えているようだ。数年前、青年海外協力隊の事務局の方から相談を受けた。任期を終えて帰国した協力隊員は、いつ、どこで、何人を対象に自動車の修理を教えたとか、農業を教えたとか、きちつとした報告書を書いてくる。ところが、現地の人々とすこして何を感じたか、どんなことを思ったのかなどの発表となると、言葉が少なくなる。最も大切なのは何をしたかではなく、どのような人間的交流をしたかなのに、それがよくわからない。どうしたものか、というのである。

私は驚いた。青年海外協力隊に応募する者は強い社会貢献へのはつきりした動機をもち、それゆえ、人間への関心も強いものと思いついてきたからだ。海外協力隊員においてすら、感情交流が希薄になっているというのである。

さらに次の例は、京都大学に留学した銭紅雨さん（中国・南京）とライさん（マレーシア）、二人の女学生の会話である。

銭 言葉だつて問題になるかもしれないけれども、たとえば、わたしたちこのように喋るなら、日本人ともこのように喋るじゃない。しかし、日本人と、なぜ友達になれないか、なぜ、あまり親しくないか。日本人は、外国人に対して、興味がない面もあるじゃないですか。
ライ 興味、まったくないともいえなないかもしれないけど、一

時的の感じあるですね。とりあえず、外国人留学生だから、ちよつとだけ話して。それ以上の深さが……。

銘 たたとえば、会ったら、「はあい、こんにちは、元気？ あ。終わります」（笑）。いま、二人くらい、ちよつとよく喋るほうかな。でも、それも話題がすく限られていますね。試験とか、それくらい。話題がない。わたしも、彼女たちとどんな話題するか考えたけど分かんないですよ。彼女たちが、何の関心持っているか。「就職どうなっているの？」とか、「進路どうするの？」とか、それくらいですね。

（『京都大学新聞』、一九九七年七月一日、紙上座談会）

ここでも、アジアの若者から見た、日本の若者の会話の乏しさについて語られている。それは相手の文化をよく知らないといった表層の文化摩擦でなく、より根元的な文化摩擦である。人間関係の取り方そのものが変わってきていると伝えている。

日本の子どもたちは、幼いときから他の子どもから距離をとり、仲良くつきあうことが求められる。「仲良くするのよ」に加えて、「がんばりなさい、負けてはいけない」と駆り立てられる。こうして人間関係を楽しむよりも、集団への適応と学習範囲を決められた知識の習得に上手になる。

青年期になり、同性への関心、異性への関心、あるいは「なぜ生きるか」「どう生きるか」といった社会への問いが湧いてくる。

だが、他者との交流体験の乏しい若者はそれを口に出せない。そんな幼稚なこと、答えないくならないことを言つて、自分の弱さを知られてはいけなさと構えるからだ。これでは人間関係は一見上手になつても、内面は空虚になつてしまう。とりわけ高等学校の教育はこの傾向を強いており、他者との交流の喜びや議論の大切さを奪つている。

自分の感情に気づき、言葉にして伝える。相手の感情に共感して、それを伝える。このようなコミュニケーションが、人の感情を豊かにする。それなしに、これこれの状況では泣く、このような場面では驚愕すると、劇画調に感情表現を知識として覚えても、感情は豊かにならない。だが、現状はそこまで到つているのである。

日本をのぞき、欧米先進国でも、アジアやアフリカなどの経済発展途上国においても、文明の方向はやはり、人と人との付き合いを楽しむことからずれてはいない。この島国における情報化は、異質な方向にそれているように思えてしかたがない。

(野田正彰『共感する力』みすず書房より)